

県外在住の沖縄県出身者の故郷との宗教的連帯

平井 芽阿里 (HIRAI Meari) *

本研究は、本土在住の沖縄県出身者個々人が日常的に実践する民俗宗教に着目し、故郷との宗教的連帯について考察することを目的とする。

日本の南側に位置する奄美、沖縄、宮古、八重山諸島を含む南西諸島には、「御嶽（ウタキ）」と呼ばれる神々の聖なる森が点在している。御嶽の嶽には「森」という意味があるように、内部や周囲には神々の依代となる木々が茂り、伐木だけでなく、枝一本を手折ることさえも禁じられてきた。御嶽には、村落の創始者や守護神を祀り、時折来訪する神々を迎え入れる場所として、各村落に一カ所、あるいは複数あることもある。神社と同様に鳥居や社殿が設置されている場合もあるが、根本的に異なる点は、原則として一般の自由な立入や自由な参拝を認めていない点にある。御嶽では村落の豊穰祈願や健康祈願、厄払い儀礼や新生児の登録などの村落祭祀が執り行われている。村落祭祀の担い手となるのは、神役という家筋や血筋、くじ引きで選出された女性を中心とする神役集団や祭祀組織であり、御嶽内部も男性の立ち入りを禁ずることがあるなど、女性優位で行われることが多いといえる。

本研究では、これまで10年間にわたり、主に沖縄県宮古島市の西原という地域を対象とし、本来神々に関する事柄には決して改変を加えてはならないという暗黙の禁忌を犯す形で村落祭祀に関わる項目に意図的な改変を加えるなど、地域住民や神役が生成と再編成を繰り返しながら村落祭祀や祭祀組織を維持する過程を明らかにしてきた。

1980年代以降、各地で村落祭祀を維持する祭祀組織の解体や担い手となる神役の候補者不足などが指摘され、2000年以降にあつては、急速に村落祭祀の維持が困難となっている。従来の研究では、時代変容によって祭祀組織が開かれていく過程を「衰退化」、「解体」、「形骸化」といった言葉で形容してきた傾向にある。しかし、生成と再編成の過程や祭祀組織を構成する成員に目を向けてみると、女性神役は減少しても男性神役は増加するなど、祭祀組織の安定的な成員確保と安定的な存続は必ずしも同義とはいえず、成員個々人の加入後の実践も個々に異なっているという状況がある。

そこで本研究では、現在、西原の祭祀組織の主要な構成員となっている愛知県在住の沖縄県出身者を対象とし、本土在住でありながら意図的に故郷の祭祀組織に加入をし、自ら神役に就任し村落祭祀の担い手となる経緯、加入後の村落祭祀への参加に向けて行われる勉強会などの実践、祭祀組織には加入しないものの、本人の自覚がない所で故郷の御嶽に名前を登録され、生涯にわたる神々との繋がりを約束されている事例、本土の生活の中で解決する事のできない霊的な問題に対し、故郷沖縄から宗教的職能者を招請することで解決を図ろうとする事例を考察する。

以上のように、本研究は伝統的な地域集団を再編成を繰り返しながら生成されるものとして捉え直した上で、所属する個々人の日常実践の分析を通し、改めて多元主義的 (Pluralism) 視点から再検討することによって、本土在住の沖縄県出身者と故郷との宗教的連帯の実態を解明することを目的とする。

(参考文献)

- 平井芽阿里 2012 「愛知県の沖縄県出身者と沖縄系コミュニティに関する一考察」『GCOE Working Papers 次世代研究』58 京都大学グローバル COE プログラム 「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」
平井芽阿里 2012 『宮古の神々と聖なる森』 新典社

* 日本学術振興会特別研究員 (PD) 國學院大學大学院文学研究科。